

瀬部の「こんぴらさん」

熊澤 良嗣 調

正式名は「金刀比羅宮 尾張分社」(ことひらぐう おわりぶんしゃ)であるが、地元では親しみを込めて「こんぴらさん」と呼んでいる。全国には多くの「こんぴらさん」が存在するけれども、本宮分社は東京・一宮・鳥羽・神戸・出雲・松山の6つだけである。

瀬部の金刀比羅宮がいつできたかは明らかでないが、当地四日市場の豪家であった平田家が創建したものだといわれている。江戸時代^{てんぽう}天保12年(1841)の瀬部村地図を見ると、かつての巡見街道と新般若用水が交差する地点の西北の一角(現平田薬局・正圓寺・金刀比羅宮の辺り)に、『阿部様御除・・・平田家屋敷』——阿部様については追加情報017「瀬部の阿部さまとは」で紹介済み の書込みがある。また、地図の余白には『右村庄屋 平田家』と記されている。

当社宮司の覚え書き「尾張分社について」によれば、文政9年(1826)に平田勇左衛門が、私財を投じて老朽化していた社殿を^{改築}改築したとされる。その社殿の大きさは、間口1間2尺・奥行1間1尺5寸・建坪1坪6合5勺、拝殿の大きさは間口2間4尺・奥行4間1尺・建坪5坪6合5勺で、いずれも粉葺(そぎぶき = 削ぎ板で屋根を^葺く)建築だったという。(一宮市史西成編では、同じく平田勇左衛門が『文政9年、信仰により一寄進を以て本殿及び拝殿を^{建築}建築』とある。)

爾来平田家の私祭祠として祀られてきたが、信者が次第に増えて「崇敬講社」が設立されるまでになったため、明治23年4月、本宮宮司と連名で愛知県知事に願い出て、8月に讃岐金刀比羅宮の^{けいがい}境外末社として認められた。祭神は本宮と同様に大物主命と^{すたく}崇徳天皇である。

金刀比羅宮は古くから航海・水運の神として崇敬する人が多く、木曾川河畔でも渡しがあったところでは「こんぴらさん」が祀られているのを見かける。それらを訪ね歩いた人によると、草井の渡し辺りで「昔は木曾川から小舟で（新般若用水を通り）瀬部の里へ荷物を運んだ」、「渡しの関係者は瀬部の金刀比羅神社へ参拝に出かけた」という話を聞いたという。やはり、瀬部の「こんぴらさん」も水運と関係が深いようだ。

社殿は長い間東を向いて建っており、目の前には新般若用水（1791年開削）が流れていた。今は県道64号が神社の南を通っているが、これは昭和になってできた新道旧道は巡見街道——であるから、川向こう（新般若用水より東）の人たちにとっての参道といえば、神社前で川に架かっている太鼓橋を渡り東に進む一本道しかなかった。（隣接する正圓寺東のその位置に今でも橋が架かっている。）

尾張分社は日常は平田家が本宮傭員として奉仕し、例祭日になると本宮から神職がやってきて奉仕していたらしい。しかし昭和15年から本宮派遣の神職が常駐するようになった。これと前後して神社の南側を東西に四日市場を貫通する形で県道64号が開通したので、一宮からも古知野（江南）からも交通至便になった。

こういった事情から昭和19年に隣接地の寄進を受けて境内地が拡張され、東を向いていた社殿は南を向いて現在位置に移り、「正遷座祭」がおこなわれた。また昭和63年には「昭和の大修理工事」がおこなわれ、本宮から琴陵容世氏（現金刀比羅宮宮司）がやってきて遷座祭・奉祝祭を執行した。鳥居も木製から石製に新調された。

尾張分社の主要祭事は、正月・4月（例大祭）・7月（夏祭）の年3回おこなわれる。例大祭では「かしわごぼうの炊き込みご飯」が有名でファンが多い。夏祭りでは「茅の輪く

ぐり」神事があり、出店が境内に立ち並ぶ。その他10月10日の本宮例大祭——琴平では9～11日の3日間に尾張分社として毎年出かけ、古式ゆかしい御神幸みかみゆきの行列に白装束姿で参加している。

補足

「こんぴら」の正式表記は金刀比羅宮だが、全国には様々な表記の「こんぴら」がある。琴平・琴比羅・琴毘羅・金比羅・金毘羅・金刀比良・事比良・事比羅などで、後に神社・社・宮のいずれかが付く。すべて「こんぴら」の音おんを当てていると思われる。

「こんぴら」はヒンズー教の「クンビーラ」(インダス川の鱈神)の音写であり、これが仏教に取り入れられて、十二神将中の君毘羅大将(金毘羅童子)になったのだという。

神社より寺院の力が強かった武家社会の時代では、本地垂迹ほんじすいじやく(神仏習合)が盛んに行われ、琴平山(象頭山 ぞずさん)の神も「金毘羅大権現」と名を変え、象頭山松尾寺金光院まつおじこんこういんが総本山となっていた。松尾寺金光院へ参詣することが「金毘羅参り」であった。

しかし、明治新政府が布告した神仏分離令によって松尾寺金光院が退けられると、「こんぴらさん」の正式名称は「金刀比羅宮」となり、神道の神社になった。